1部77円（税込み）

対がん協会報

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104－0045 東京都中央区築地５－３－３ 築地浜離宮ビル７階
☎ 03－3541－4771 FAX 03－3541－4783 https://www.jcancer.jp/

第731号 2023年（令和５年）９月１日（毎月１日発行）

主な内容

２～４面 朝日がん大賞・日本対がん協会賞 受賞者紹介
５面 がんの経済的負担を推計 国立がん研究センターなど
６面 HPVワクチンに関する調査 厚労省が結果を公開

2023年度 朝日がん大賞

秋山正子 マギーズ東京共同代表理事 センター長

訪問看護や在宅ケア、マギーズ東京などによる患者支援

日本対がん協会賞は４個人と１団体へ

公益財団法人日本対がん協会は、９月のがん征圧月間に合わせ、2023年度の日本対がん協会賞と、その特別賞である朝日がん大賞の受賞者を決定した。朝日がん大賞は、認定NPO法人マギーズ東京共同代表理事・センター長の秋山正子氏（73）に贈られる。長年にわたる訪問看護や在宅ケア、マギーズ東京などを通じたがん患者・家族支援が評価された。日本対がん協会賞は４個人と１団体に贈られる。表彰式は９月８日、山口市で開かれる第56回がん征圧全国大会 山口大会で行われる。＝２～４面に関連記事

秋山氏は看護大学を卒業後、病院での臨床や看護教育に携わってきたが、1990年にがんと診断された姉の在宅療養を経験し、病院ではなく生活の場で療養できるよう看護を届ける仕事がしたいと考え、1992年に東京都新宿区で訪問看護を開始。2008年11月に参加した国際がん看護セミナーで、がん経験者や家族がくつろぎ、悩みを相談できる英国発祥のマギーズキャンサーケアリングセンターを知り、2011年に同センターを参考に、誰もが気軽に相談できる「暮らしの保健室」を高齢化が進む新宿区戸山の大規模団地の一画に開設した。その後、同様の施設は北海道から九州まで広がっている。2016年10月、暮らしの保健室を発展させる形で、東京都江東区に日本初の正式なマギーズキャンサーケアリングセンターである「マギーズ東京」が開設された。マギーズ東京の運営費は寄付金で賄い、患者らは無料で相談できる。家でも病院でもない「第三の場所」として、原則予約なしで看護師ら専門職がじっくり話を聞き、利用者が自分で考える力を取り戻せると評価されている。

日本対がん協会賞の個人の部は、徳山中央病院緩和ケア内科主任部長の伊東武久氏（78）▽東大宮クリニック院長の高橋道子氏（80）▽福井県がん検診精度管理委員会幹事の広瀬真紀氏（73）▽山口県予防保健協会副理事長の松本常男氏（71）が選ばれた。いずれも地域でのがん予防やがん検診の推進、がん治療、患者支援などの業績が評価された。

団体の部は、地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立駒込病院（戸井雅和院長）が選ばれた。コロナ禍の中、積極的に感染者を受け入れる一方、がん患者に対し造血幹細胞の移植を続けた。また、がん教育にも力を注ぎ、地元の学校へ医師らを派遣し知識の普及にも努めた。

日本対がん協会賞は、協会設立10周年の1968年、がん征圧運動の一層の高揚を図る目的で創設された。対がん活動に顕著な功績のあった個人と団体、長年にわたり地道な努力を重ねてきた個人と団体などに贈られる。また、朝日がん大賞は、日本対がん協会賞の特別賞として2001年に朝日新聞社の協力で創設。がん予防を対象に、将来性のある研究の発掘、医療機器類の研究・開発、患者支援などで優れた実績をあげて社会に貢献し、かつ、第一線で活躍する個人・団体などに贈られる。

◇

2023年度の選考委員会は次の通り。

委員長 垣添忠生・日本対がん協会会長▽**副委員長** 大内憲明・東北大学大学院医学系研究科特任教授・東北大学名誉教授▽**委員**（五十音順） 梅田正行・日本対がん協会理事長、佐野武・がん研究会有明病院病院長、津金昌一郎・国際医療福祉大学大学院医学研究科公衆衛生学専攻教授、野瀬輝彦・朝日新聞東京本社くらし報道部長、松本吉郎・日本医師会会長

2023年度 日本対がん協会賞・朝日がん大賞の受賞者

朝日がん大賞

秋山 正子（あきやま・まさこ）73歳
認定NPO法人 マギーズ東京
共同代表理事 センター長

日本対がん協会賞

個人の部

伊東 武久（いとう・たけひさ）78歳
徳山中央病院緩和ケア内科主任部長

高橋 道子（たかはし・みちこ）80歳
東大宮クリニック院長

広瀬 真紀（ひろせ・まき）73歳
福井県がん検診精度管理委員会幹事

松本 常男（まつもと・つねお）71歳
山口県予防保健協会副理事長

団体の部

地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立駒込病院（戸井雅和院長）

※敬称略、年齢は9月1日現在

英国発祥のマギーズセンターに感銘
がん患者が自ら考える力を取り戻せる場を提供

朝日がん大賞の 秋山正子氏（73）

秋山正子氏

看護大学を卒業後、京都府内の病院での臨床や看護教育に携わってきた。1990年、がんで余命１カ月と告知された41歳の姉が在宅療養に入り、上京して姉の看護をした。その経験から、病院ではなく生活の場で患者が療養できるよう看護を届ける仕事がしたいと考え、1992年から東京都新宿区で訪問看護を始めた。

その後、2001年に「ケアーズ白十字訪問看護ステーション」を設立し、新宿区を中心に活動を続け、がん患者を含め多くの在宅療養の患者を看取ってきた。しかし、この間、がんの診断・治療の環境は大きく変わり、多くの患者は外来での治療が中心になり、日常生活でのちょっとした困りごとや病気についての悩みを気軽に話せないまま、時間が残り少なくなってから訪問看護に繋がることが多く、そんな状況を変えられないかと考えていた。

きっかけは2008年11月、国際がん看護セミナーに参加した際、英国のマギーズキャンサーケアリングセンターを知ったことだった。同センターでは、相談者が自分自身の力で物事を考えられるようサポートしていた。さらには、見晴らしのいい大きな窓を備え、バリアフリー構造の建物、花や緑の木々に囲まれた立地環境も相談を受けるために必要なものとして整備され、そのうえで様々な支援活動が行われていることに驚かされた。日本でも必要とされている「場」であり、「支援」だと感銘を受け、その後、仲間を募って英国の同センターを視察。その１年後に同センターCEOのローラ・リー氏を日本に招き、講演を行った。

2011年、同センターをモデルに、日常の悩みごとを気軽に相談できる「暮らしの保健室」を東京都新宿区に開設した。ただ、その後も「日本にもマギーズセンターを」との思いは消えず、少しずつ仲間を増やしていた中、2014年にAYA世代の乳がんサバイバーであり、同じ思いを抱いていた鈴木美穂氏と出会った。翌年にNPO法人を設立し、多くの支援によって2016年10月、東京都江東区の豊洲にマギーズ東京がオープン。鈴木氏とともに共同代表理事に就いた。現在、センター長も兼務している。

マギーズ東京は日本初の正式なマギーズキャンサーケアリングセンターで、英国をはじめ香港、スペインなど世界20カ所以上あるセンターの一つ。英国にある本部の方針を受け、マギーズ東京の運営も全てチャリティで賄われている。木材を多用し、大きな窓を備えたバリアフリー構造の平屋２棟を渡り廊下でつなぐ。すぐそばを運河が流れ、都会の喧騒から切り離された空間になっている。

現在のスタッフは看護師、心理士、保健師、栄養士が常勤、非常勤で10人ほど。原則予約なしで、無料で相談を受け、月２回は夜間の相談窓口を開いている。また、脱毛・頭皮ケア、食事と栄養、ホルモン療法、リンパ浮腫、グリーフケアなど様々なプログラムを企画運営している。６周年となった2022年時点で３万６千人以上のがん経験者や家族、医療者らが訪れた。

朝日がん大賞では初めての女性受賞者となる。訪問看護、悩みごと相談とこれまでの取り組みを通じ、「当事者支援は今後、益々必要であり、あとに続く人たちにとっても助けになる。今後も継続できるよう取り組んでいきたい」と話している。

自然に囲まれたマギーズ東京

略　歴

訪問看護師・保健師。1950年７月、秋田市生まれ。高校生の時に父親をがんで亡くしたことがきっかけで看護師を目指し、1973年に聖路加看護大学衛生看護学部（当時）へ。卒業後、京都の病院の産科病棟で働いていたが、1990年、まだ制度の無い時代に、姉のがん末期での在宅療養の試みを通し、訪問看護の重要性に気付いたという。現在は、マギーズ東京共同代表・センター長のほか、株式会社ケアーズ代表取締役・白十字訪問看護ステーション統括所長、特定非営利活動法人白十字在宅ボランティアの会理事長・暮らしの保健室室長、第22期東京都社会福祉審議会委員・順天堂医療看護学研究科大学院非常勤講師などを務める。2019年に第47回フローレンスナイチンゲール記章を受章。

日本対がん協会賞　個人の部

長年にわたり婦人科がんの予防と治療、緩和ケア医療に尽力

伊東 武久（いとう・たけひさ）78歳　徳山中央病院緩和ケア内科主任部長

伊東武久氏

京都府京丹後市出身。山口大学大学院医学研究科博士課程を修了後、産婦人科に入局した。1977年に徳山中央病院産婦人科部長として赴任して以来、半世紀近くにわたり、同院で婦人科がんの予防と治療に積極的に取り組んできた。がんの予防、治療から看取りまで長年にわたる功績がある。また、医療現場にとどまらず、地元テレビ局の番組への出演などを通じ、子宮頸がん予防のためのHPVワクチンの普及啓発などにも努めた。

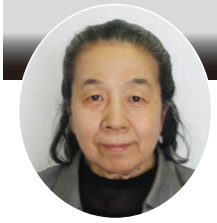
産婦人科医としてがんの予防、治療に加え、がん患者の相談にも応じた。そうした中で緩和ケア医療の必要性に気づき、他院の医師と地域での緩和ケア医療に取り組むようになり、2008年12月、徳山中央病院での緩和ケア内科の開設につながった。25床の緩和ケア病棟、在宅診療を含む緩和ケア外来に加え、病棟をラウンドする緩和ケアサポートチームを立ち上げ、末期がん患者と家族の医療支援に携わってきた。

2006年にがん対策基本法が成立し、翌年策定された第１期がん対策推進基本計画に、がん診療連携拠点病院の整備と緩和ケア提供体制の強化が盛り込まれるなど、時宜を得た対応になった。

2014年４月に同院の緩和ケア内科主任部長に就任し、引き続き病院外来、訪問診療に力を注いでいる。日本対がん協会賞を受け、「緩和ケア医療の大切さが評価されたことはうれしく、感慨深いことです」と話している。受賞を機に、緩和ケア医療の新たな人材育成につなげたいとも願っている。

子宮頸がんはじめ女性のがんの治療、知識の普及に貢献

高橋 道子（たかはし・みちこ）80歳　東大宮クリニック院長



高橋道子氏

1969年３月に新潟大学医学部を卒業。その後、新潟県立がんセンター新潟病院、国立がんセンター（現国立がん研究センター）、癌研究会附属病院（現がん研有明病院）、埼玉県立がんセンターに勤務した。

「女性の病気は女性が診るのが望ましい」との信念の下、婦人科領域の悪性疾患の診断・治療に携わり、長きにわたり埼玉県下の公的医療機関において診断の精度と治療成績の向上に尽力してきた。

2009年に埼玉県健康づくり事業団診療所長に就任し、がん検診、特に子宮頸がん検診の啓発・普及、精度及び受診率の向上に努めた。また、子宮がんの早期発見及び検診の精度を高めるため、積極的に液状化検体細胞診（LBC）の有用性を提唱し、検診への導入を図った。

さらには、地域住民へのがん知識の普及・啓発のための講演会、産業保健分野の人材育成に資するための看護学部学生への講義等に取り組んだ。ピンクリボン運動、がん検診受診勧奨の街頭キャンペーンなど、がん検診受診率向上のための各種活動にも精力的に参加した。定年退職後は、地元に婦人科クリニックを開業し、婦人科領域のかかりつけ医を目指し、精力的に活動している。

この度、日本対がん協会賞を受賞して、「今までの活動が評価され、今回受賞できたことを大変光栄に思います。今後も、地域の女性にとって受診しやすい婦人科を目指し活動していきたいと思います」と話している。

福井県内のがん検診の一元的管理、精度管理の向上、均てん化に貢献

広瀬 真紀（ひろせ・まき）73歳　福井県がん検診精度管理委員会 幹事

広瀬真紀氏

福井県では検診車による集団検診、医療機関での個別検診が市町村単位ではなく、県全体で一体的に管理されている。また、福井県医師会と福井県健康管理協会が福井県がん検診精度管理委員会を設け、個別検診を行う医療機関のレベルアップ、集団・個別検診の精度管理、がん検診料金の均一化が図られた。こうした体制の構築に貢献したことが評価された。

さらに、2017年３月には、全国初となる「胃がん内視鏡読影センター」を福井県医師会内に設けるなど先駆的な取り組みも評価された。

日本対がん協会賞を受け、「消化器外科医、乳腺外科医、麻酔科医として出発し、その延長線上で、がん検診に取り組んでまいりました。2006（平成18）年のがん対策基本法成立以降は、がん検診精度管理委員会の責任者として、婦人科を含む５つのがん検診全てに関わってきました。福井県下統一したがん検診システム、精度管理システムができました。これらを評価されたことを本当にうれしく思っています」と喜びを語った。

そのうえで「今後は、その、プロセス指標の向上をめざし、偽陰性と中間期癌等の狭間の課題に携っていこうと思っています。今回の受賞はその励みとなります。多くの関連する行政の方々や我々の組織の皆様のおかげで受賞する事が出来ました事、皆様に感謝いたします」と話している。

肺がん検診の画像読影、後進の指導など通し、県民の健康増進に貢献

松本常男（まつもと・つねお）71歳　公益財団法人 山口県保健予防協会 副理事長

松本常男氏

広島県出身。1976年に山口大学医学部を卒業後、同大医学部附属病院などを経て1990年に渡米し、シカゴ大学放射線科カートロスマン放射線像研究所でコンピューターを利用した画像診断を学んだ。帰国後、1995年に山口大学医学部助教授（放射線科）などの後、2016年から国立病院機構山口宇部医療センター院長を務めた。

これまでの間、山口県成人病指導管理協議会の肺がん部会長や、がん登録評価部会の委員として肺がん検診の普及啓発、精度管理の向上に貢献。放射線科専門医、放射線診断専門医、肺がんCT検診認定医として長年にわたり、山口県保健予防協会が実施している健康診断、がん検診での胸部レントゲン撮影等の診断に携わり、県民の健康保持増進に大きな役割を果たした。

また、山口県生活習慣病検診等従事者講習会の講師として、自治体の担当者に対し、がんに関する正しい知識の普及啓発にも努めた。特定領域がん診療連携推進病院（肺がん）である山口宇部医療センターでは肺がんの診療、教育に従事し、肺がん治療等に尽力している。

日本対がん協会賞を受け、「大変光栄なことであり、驚いている」と話している。第４次がん対策推進基本計画では、肺がんを含め、がん検診の受診率目標が50％から60％に引き上げられた。今後、山口県内のがん検診受診率のさらなる向上に努めたいという。

日本対がん協会賞　団体の部

コロナ禍での造血幹細胞移植の継続と、がん教育による知識普及に貢献

地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立駒込病院（戸井雅和院長）

（左から）脊山泰治医師、土岐典子医師、戸井雅和院長

1879（明治12）年、伝染病診療のため内務省が設置した「駒込避病院」が前身。東京市（現東京都）へ移管された後、がんの増加を背景に、1975年にがんと感染症のセンター機能を有する高度専門総合病院として生まれ変わり、現在に至る。

1986年から白血病や悪性リンパ腫などの造血器腫瘍患者らに対する造血幹細胞移植を始め、2013年に全国初の造血幹細胞移植推進拠点病院に選定された。2023年６月時点の移植数は2600件超。他施設の看護師、医師らを研修で受け入れるなど人材育成にも取り組む。

コロナ禍の中では、都立病院として感染患者を積極的に受け入れる一方、無菌室病棟で造血幹細胞移植（同種および自家）も予定通り実施された。新型コロナ対応で全科から動員され、スタッフが少ない中、2020年は142件、2021年148件と移植数は全国トップが続いた。

日本対がん協会賞を受け、戸井雅和院長や血液内科の土岐典子医師は「移植チームの努力の積み重ねが評価され、大変光栄なこと。新型コロナと一般診療の両立は大変だった」「無菌室病棟内で、新型コロナウイルス感染のクラスターをおこさずに、移植を続けられたのは誇れること。全科が全力を尽くした結果」と振り返った。

同院は、がん教育にも対応し、小中学校などへ外部講師として医師を派遣し、正しい知識の普及啓発に努めている。授業の前後で児童・生徒に対し、将来のがん検診受診の意向などを聞くアンケートも実施。がん教育を担当する脊山泰治医師は「将来の受診率向上につながるのでは」と期待している。

2023年度　グループ支部永年勤続表彰 25団体、97人（敬称略）

◇**青森県総合健診センター**
櫻田真也、野上翔平
◇**岩手県対がん協会**
藤澤耕司、石澤政子
齋藤幸子、菊池伸明
長澤真美子、井上貴史
◇**宮城県対がん協会**
橋本真里子、只野尚子
◇**福島県保健衛生協会**
安藤豪見
◇**茨城県総合健診協会**
塙浩実
◇**栃木県保健衛生事業団**
神宮直子、高橋靖子
福田真純、荒井崇子
信夫芳恵、幕田美怜
◇**群馬県健康づくり財団**
倉林明男
◇**埼玉県健康づくり事業団**
川崎剛史、山岸俊之
◇**ちば県民保健予防財団**
桐谷葉子、佐藤和代
大井政幸、倉内和世
大同俊輔、岡庭まき
増田ありさ、藤井孝俊
大野美智子、田村久美子
菅谷委子、鶴岡英子
四宮友紀、藤代誠
田村純子、石川伸子
川田友香
◇**長野県健康づくり事業団**
中島美幸、下島規子
宮澤健治、髙橋良和
岡澤千恵、梅野宏美
村田洋、島田正浩
嶋裕美、中澤誠
荒井通子
◇**滋賀県健康づくり財団**
辰田智子
◇**京都予防医学センター**
今西昭雄、赤澤みゆき
◇**兵庫県健康財団**
井上政次、大谷克信
末次剛、渡部理沙
◇**鳥取県保健事業団**
村尾保雄、津村拓朗
◇**広島県 地域保健医療推進機構**
山本嶺花、田渕真由子
藤井奈穂子、岩田純子
大下美幸
◇**山口県予防保健協会**
田中由紀子
◇**とくしま 未来健康づくり機構**
堀江幸恵、山本由美
小出佳子
◇**香川県総合健診協会**
板倉謙次、荒尾隆広
◇**愛媛県総合保健協会**
元木伸也、重藤寛幸
宮田静、上田章仁
渡部陽子、黒田由美子
橋本卓郎、大久保武志
◇**高知県総合保健協会**
寺澤優代、横田俊作
◇**ふくおか公衆衛生推進機構**
桐谷綾、釜本仁志
中村和也、平井隆浩
◇**佐賀県健康づくり財団**
野田優也、田中和歌子
◇**長崎県健康事業団**
冨永久仁子、本田里沙
本村志武輝
◇**熊本県総合保健センター**
倉永英子、兵頭由美
前悠佳璃、後藤由希子
永田史絵、米岡奈美
緒方ゆかり、岡田みはる
◇**沖縄県健康づくり財団**
幸地和枝

予防可能ながんの経済負担は 1兆240億円

禁煙や感染症対策で軽減に期待

国立がん研究センターなどの研究グループが推計

国立がん研究センターがん対策研究所と国立国際医療研究センターによる研究グループは、日本人のがんによる経済的負担と、生活習慣や環境要因など予防可能なリスク要因に起因するがんの経済的負担を推計し、公表した。

がんは1981年以降、日本人の死因の第１位になっているが、社会に与える経済的負担を推計した研究はほとんどなかった。直接的な医療費に加え、治療中の一時的な就業中断による労働力からの離脱など、がんは社会にも大きな影響を与えている。

一方で、がんの原因を予防できれば、がん関連の直接医療費や労働損失を避けられると考えられる。研究では、がんの罹患数･死亡数のうち、その要因がなければ防げたかもしれない罹患･死亡数の割合を検討し、医療費などの経済的負担がどの程度になるかを調べた。

日本人の場合、がんの36％（男性は43％、女性は25％）は避けられる･予防できる要因によって起こると考えられ、「喫煙」と、ヘリコバクター･ピロリ菌やヒトパピローマウイルス（HPV）、B型･C型肝炎ウイルスなどの「感染」が２大要因という。

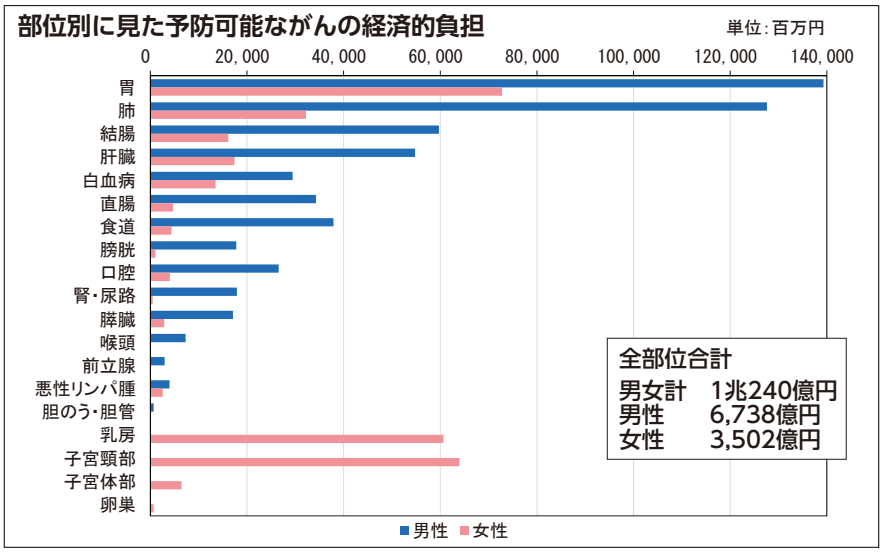
今回は、2015年時点のがん患者数や直接医療費を算出し、予防可能なリスク要因である生活習慣や環境要因（喫煙、飲酒、過体重、運動不足、感染、食事、外因性ホルモン使用、母乳育児、大気汚染等）によるがんの直接医療費（診察･医療費、処方･薬剤費等）、死亡や罹患（受療による欠勤や休職）に伴う労働損失を推計し、経済的負担を評価した。

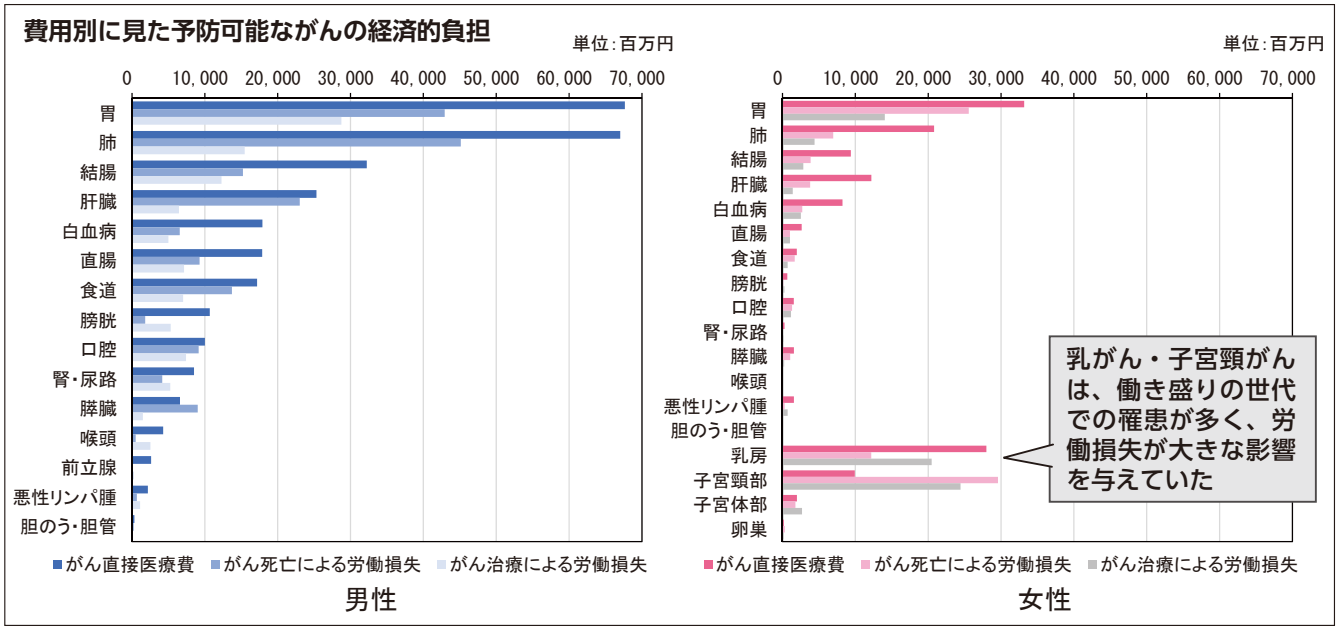
その結果、がんによる総経済的負担は約２兆8,597億円（男性約１兆4,946億円、女性約１兆3,651億円）で、経済的負担は男女間で大きな差がないことがわかった。

このうち予防可能なリスク要因によるがんの経済的負担は約１兆240億円（男性約6,738億円、女性約3,502億円）で、男女ともに胃がんの経済的負担（男性約1,393億円、女性約728億円）が最も高く、次に男性は肺がん（約1,276億円）、女性は子宮頸がん（約640億円）が高いことがわかった。

予防可能なリスク要因別の経済的負担は、「感染」が約4,788億円と最も高かった。また、がん種別では、ヘリコバクター･ピロリ菌による胃がんが約2,110億円、HPVによる子宮頸がんが約640億円と推計された。

予防可能なリスク要因に対する適切な対策を施し、がんを予防･管理することは、命を救うだけでなく、経済的負担の軽減につながると期待されている。





※国立がん研究センターの説明資料より

厚生労働省

HPVワクチンへの理解は？ アンケート結果を公表

子宮頸がんの原因となるHPV（ヒトパピローマウイルス）感染を防ぐワクチン接種の対象者への積極的呼びかけが2022年度から再開されたことから、厚生労働省は、接種対象者となる小学校６年生～高校１年生に相当する年代の女性や保護者の理解度をみる調査を実施。予防接種を実施する自治体の情報周知の状況なども調べ、結果を公表した。

子宮頸がんやHPVワクチンに対する理解

子宮頸がんについては、対象者の69%、保護者の91%が「知っている」「少し知っている」と回答した。「子宮頸がんは深刻な病気だと思う」との問いに対し、対象者の76%、保護者の85%が「非常にそう思う」「そう思う」と答えた。

HPVワクチンについて、対象者の28%、保護者の９%が「知らない（聞いたことがない）」と回答。接種方法や必要な手続き、国がHPVワクチン接種の積極的勧奨を再開したことについて、対象者の53%、保護者の23%が「知らない（聞いたことがない）」と回答した。

積極的勧奨の再開と同時に、国が1997～2005年度生まれの女性に対し、公費でワクチン接種の機会を提供する「キャッチアップ接種」については、対象者（高校２年相当～1997年度生まれの女性）の53%、保護者（小学校６年～高校３年相当の女性の保護者）の26%が「知らない（聞いたことがない）」と回答した。

HPVワクチンの重要性について「非常にそう思う」「そう思う」の回答は、対象者の49%、保護者の52%になったが、安全性について「非常にそう思う」「そう思う」は対象者の22%、保護者の23%にとどまり、対象者の59%、保護者の55%は「どちらともいえない」と回答した。有効性については、対象者の43%、保護者の49%が「非常にそう思う」「そう思う」と答えたが、対象者の50%、保護者の45%は「どちらともいえない」とした。

「HPVワクチンのリスクについて十分な情報がなく、接種するか（させるか）決められない」との問いに、対象者・保護者の各51%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答。さらに、接種によって以前報道で見たような健康被害が起きるのでは、と思っているかを聞くと、対象者の38%、保護者の49%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。

HPVワクチンに関する誤情報のうち、「どちらともいえない」との回答が多かったのは、「接種すると子宮頸がんにかかる可能性がある」（対象者47%、保護者46%）、「接種すると不妊や流産を起こす」（対象者本人51%、保護者50%）、「子宮頸がん検診を受けていれば接種する必要はない」（対象者46%、保護者45%）、「すでに性的接触を経験した人は接種しても意味がない」（対象者45%、保護者44%）などがあった。

HPVワクチンに対する考え方

HPVワクチンの接種について、接種したことがある（１回接種、２回接種、３回接種、何回接種したかはわからない・覚えていない）との回答は、全体の24%だった。

接種理由は「HPVワクチンは有効だと思っているから」（対象者36%、保護者66%）、「子宮頸がんは危険だと思ったから」（対象者42%、保護者57%）などが多く、次いで対象者では「母親が接種を勧めていたから」（33%）、保護者では「公費で接種できるから」（33%）となった。

接種した人のうち「３回接種」以外の回答者に今後の意向を聞いたところ、対象者の45%、保護者の38%が「わからない」と回答。対象者の28%、保護者の32%は「強く接種したい/させたい」「接種したい/させたい」と答え、対象者の28%、保護者の31%は「あまり接種したくない/させたくない」「強く接種したくない/させたくない」と回答した。

「強く接種したい/させたい」「接種したい/させたい」の理由は「子宮頸がんは危険だと思ったから」（対象者65%、保護者60%）、「有効だと思っているから」（対象者53%、保護者63%）となった。

一方、「あまり接種したくない/させたくない」「強く接種したくない/させたくない」との回答者では「安全ではないと思うから」（対象者28%、保護者47%）、「十分な情報を得られていないから」（対象者24%、保護者43%）、「友人も接種していないから」（対象者16%、保護者15%）などの理由が多かった。

情報周知の実態に関する調査

対象者への個別案内については、2023年１月末時点で90%以上の自治体が年度当初に計画していた送付対象者への送付を終えている。また、厚労省作成のリーフレットを自治体HP、窓口で掲載・配布している自治体は全体の半数程度だった。担当者が抱えている問題意識としては「接種に対する不安感の払拭の必要性」「効果的な周知方法に苦慮」「対象者の関心が低い」などの課題が挙げられた。

「がん検診 行ってみた！」
LiLiCoさん、スギちゃんが体験語る

2024年６月まで期間限定で動画を公開中

日本対がん協会

日本対がん協会は、国が推奨する科学的根拠に基づく５つのがん検診の受診率向上のため、タレントで映画コメンテーターのLiLiCo（リリコ）さんと、お笑い芸人のスギちゃんが検診や特定健診を受け、結果を受けるまでの動画を作成した。

がん検診は大切だと分かっていても、「痛いのか？」「時間がかかるのか？」「お金はいくらかかるのか？」と気になり、受診をためらう人もいるのではないか――。不安な気持ちが解消でき、一人でも多くの人に「私も受診しよう」「受診して良かった」と思ってもらえるよう動画の中で、市区町村が実施するがん検診は公費負担により数千円で受診できること、日本人の２人に１人が罹患しており他人事ではないこと、早期発見・早期治療でほとんど治せることなどの説明もある。

動画は「LiLiCoさん がん検診行ってみた」「スギちゃん がん検診行ってみた」「スギちゃん 特定健診行ってみた」の３作品で、いずれも予約から受診、結果を受けるまでを追いかけた。撮影には、公益財団法人ちば県民保健予防財団が協力した。

「健康が第一。健康じゃないと何もできない」というLiLiCoさんは、大腸がん検診と乳がん検診、子宮頸がん検診を体験した。「やったことがない人はドキドキするかもしれないけれど、やっておけばドキドキがなくなる」。受診当日は受付で、事前に採取した大腸がん検診の検体を提出し、乳がん検診へ。マンモグラフィ（乳房エックス線検査）を受けて「全然痛くない」と驚いたように話した。最後に子宮頸がん検診を受け、受付に戻って会計を済ませた。公費負担もあり、３つの検診の受診費用は半額以下になった。

後日、いずれも精密検査の必要はないとの結果を受け、「ホッとするのも気持ちいい。やって良かった」「自分の体を知ることはとても大事。皆さんも行ってください」と話した。

「がん検診は一度たりとも受けたことがない」というスギちゃんは、胃がん検診、肺がん検診、大腸がん検診と特定健診を受けた。がん検診に対し、「痛そう」「（金額が）高そう」というイメージがあったという。胃がん検診は胃部エックス線検査、肺がん検診は胸部エックス線検査を受けた。受診前には「結果を知るのが怖い」と話していたが、いずれも精密検査の必要なしとの結果になり、「心も体も全身で元気になった。自分の体と向き合うってワイルド」と話した。

特定健診は、がん検診も同時に受診できる場合がある。「自分の体が良いとか、悪いとか考えることは嫌だったが、検査を受けていくうちに自分の体のことを考える時間が持てた。いい時間が過ごせた」とスギちゃん。結果を受けて「数字で表され、明確で分かりやすい」と話し、体を改善する目標ができたという。

いずれの動画も2024年６月28日までの期間限定で公開している。

特設サイト
https://www.jcancer.jp/about_cancer_and_checkup/movies

がん相談ホットライン 03－3541－7830

毎日受け付けています
時間は当分の間、10：00～13：00　15：00～18：00
社会保険労務士による「がんと就労」電話相談の予約はインターネットの専用フォームで受け付けます。がん専門医による相談は今年度休止します

社労士による電話相談

態勢縮小のため電話がつながりにくいことがあります。何卒ご了承ください

2021年度グループ支部　がん検診の実施状況から　◇大腸がん

■男女合計

支部名	受診者数（A）	要精検者数（B）	精検受診者数（C）	精検の結果					精検受診率（C／B）	がん発見率（D／A）	陽性反応的中度（D／B）
				がん（D）	がん疑い	がん以外の疾患	異常なし	その他			
北海道	106,312	7,399	5,744	317	5	4,156	1,266	0	77.63%	0.30%	4.28%
青森	97,411	5,002	3,733	154	20	2,797	727	35	74.63%	0.16%	3.08%
岩手	108,196	5,608	4,446	248	0	3,108	1,089	1	79.28%	0.23%	4.42%
宮城	71,047	3,653	2,977	142	0	1,938	874	23	81.49%	0.20%	3.89%
秋田	70,673	4,167	3,162	135	30	2,059	931	7	75.88%	0.19%	3.24%
山形	130,458	6,975	5,088	94	30	3,167	1,726	0	72.95%	0.07%	1.35%
福島	112,675	6,888	4,818	146	10	2,844	1,346	472	69.95%	0.13%	2.12%
茨城	145,842	9,624	6,803	297	0	5,183	1,177	146	70.69%	0.20%	3.09%
栃木	73,438	3,507	2,439	96	36	1,782	525	0	69.55%	0.13%	2.74%
群馬	23,298	937	729	53	1	524	151	0	77.80%	0.23%	5.66%
埼玉	16,502	864	545	22	5	302	128	6	63.08%	0.13%	2.55%
千葉	104,671	6,957	3,374	82	2	2,517	770	3	48.50%	0.08%	1.18%
新潟	119,544	6,658	5,451	324	24	3,253	1,690	339	81.87%	0.27%	4.87%
山梨	15,981	756	481	19	1	331	107	23	63.62%	0.12%	2.51%
長野	88,460	5,106	3,105	129	－	2,121	737	118	60.81%	0.15%	2.53%
富山	28,520	1,606	1,073	35	0	760	277	1	66.81%	0.12%	2.18%
石川	22,447	1,310	944	42	0	673	226	3	72.06%	0.19%	3.21%
福井	51,286	2,215	1,496	94	2	1,102	298	0	67.54%	0.18%	4.24%
愛知	7,740	417	163	14	1	103	51	1	39.09%	0.18%	3.36%
三重	24,699	1,246	662	28	2	420	212	0	53.13%	0.11%	2.25%
滋賀	11,063	602	420	16	3	289	107	0	69.77%	0.14%	2.66%
京都	43,804	3,408	475	19	5	382	55	14	13.94%	0.04%	0.56%
兵庫	95,414	4,238	1,919	63	0	1,417	382	0	45.28%	0.07%	1.49%
奈良	909	50	41	1	1	30	11	0	82.00%	0.11%	2.00%
和歌山	22,045	1,309	527	20	0	363	144	0	40.26%	0.09%	1.53%
鳥取	43,734	2,293	1,468	61	4	962	441	0	64.02%	0.14%	2.66%
島根	36,046	1,652	978	44	0	0	0	0	59.20%	0.12%	2.66%
岡山	30,991	1,777	972	23	1	716	207	25	54.70%	0.07%	1.29%
広島	27,365	1,514	1,022	38	0	678	238	68	67.50%	0.14%	2.51%
山口	39,520	1,965	700	31	0	501	166	2	35.62%	0.08%	1.58%
徳島	23,629	1,864	1,049	23	4	716	274	32	56.28%	0.10%	1.23%
香川	22,496	1,320	1,127	45	2	869	211	0	85.38%	0.20%	3.41%
愛媛	68,302	3,394	2,532	72	17	1,727	664	52	74.60%	0.11%	2.12%
高知	68,313	2,791	1,764	85	5	1,195	479	0	63.20%	0.12%	3.05%
福岡	113,622	5,415	3,315	154	0	2,400	733	28	61.22%	0.14%	2.84%
佐賀	40,907	2,894	1,919	63	10	1,467	379	0	66.31%	0.15%	2.18%
長崎	40,499	2,357	1,604	62	32	1,171	339	0	68.05%	0.15%	2.63%
熊本	56,458	3,535	1,929	46	0	1,471	411	1	54.57%	0.08%	1.30%
大分	17,483	1,180	945	39	0	727	179	0	80.08%	0.22%	3.31%
宮崎	26,544	1,743	1,147	48	2	738	354	5	65.81%	0.18%	2.75%
鹿児島	62,757	3,802	2,927	91	3	2,289	532	12	76.99%	0.15%	2.39%
沖縄	41,921	2,143	1,115	47	6	710	309	43	52.03%	0.11%	2.19%
合計	2,353,022	132,141	87,128	3,562	264	59,958	20,923	1,460	65.94%	0.15%	2.70%

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

charibon by VALUE BOOKS

詳しくは「チャリボン」 https://www.charibon.jp/partner/jcs/
（ISDNのバーコードがついた書籍類が対象です）

お問合せ（株式会社バリューブックス）：0120－826－295
受付時間：10:00－21:00（月～土）　10:00－17:00（日）